

で、御協力をいただいた。ここに記して御礼を述べさせていただきます。

最後にセミナー事務局は気象研究所の新野 宏さん、途中から海洋研究所の吉崎正憲さんに担当していただいた。実際の面倒な事務をすべてひきうけていただいた両氏に厚く感謝いたします。次回のコンピーナーは、関西

地区にお願いすることになり、阪大基礎工の井上良紀さん、京大理学部の中脇資郎さんにひきうけていただくことになった。このセミナーがこれからも益々盛んになり、学会とは少し異なる面から地球流体の学問の発展に貢献するよう祈って筆をおく次第である。



増田善信 著
気象と科学

草友出版, 1984年3月刊, B6判,
189頁, 1,500円

この本は今年4月気象庁を退官した著者の退職記念出版として刊行された。著者と親交のあった人々によって計画され、全国的な募金で自費出版される予定だったが出版社の協力を得て一般書店にも出るようになった。

著者は気象研究所での退官あいさつのなかで、V. ピアクネスの言葉を借りるならば、数値予報こそ“気象学を真の科学に”するものであると考え、数値予報を生涯のテーマに選ぶようになったとのべている。著書が求めた「科学の論理」は研究や気象事業にとどまらず天気予報や予報官の心構えにまで及んだ。著者が6期6年間つとめた全気象労組の委員長時代には指導の中心的な柱として「科学の論理」は鋭く貫かれた。

組合のオルグで職場へ来た委員長から数値予報をみっちり講義してもらった人も多いはずである。かくいう私もルーチン化されて間もない、いかにも大味な数値予報天気図を前に夜を徹して一対一で講義をうけた一人である。

有志による編集委員会は、研究から数値予報の開発、気象事業のあり方から労働運動の指導まで「科学の論理」を貫こうと主張し、主張しただけでなく実践した著

者の所論を選んで後に続く人たちに残そうとした。

「地球観測百年と気象事業の展望」は1983年7月全気象労働組合がおこなったシンポジウムの記念講演であり、この著書の3分の1以上にあたる。「科学の論理」に基づく気象事業批判と将来展望である。

「数値予報をきずいた人々」は気象学会機関紙「天気」1982年10月号「数値予報と数値シミュレーションの百年」の抄録である。

「弁証法的にみた数値予報」は『OMEGA』(オメガ)最終号(1974年4月)から採録された。

「科学と平和」は筑波学園都市で開かれた集会(1983年12月)の記念講演である。

「全気象労働組合と私」は本書のために新しく書きおろした5編の小文である。労働運動にとって科学的で正しい方針がどれほど大切かわかり、著者の主張と人柄が最もよくでた文章である。

「私を変えた人—曲田さんの思い出」は誰にでもある生涯に決定的な影響力をもった人の思いを故曲田光夫さんに寄せたもので、故人の追悼文集『光雲』(1974年刊)からの再録である。

退職記念出版という制約から、著者の多方面にわたった所論の部分的な集約ではあるが、ひとりの気象学研究者の社会的活動で貫いた主張と実践の全体を知ることができる。

(岡林一夫)